

## 真冬にかき氷

山下美穂

失敗した。家から出れば鳥肌がたつような冷たい風  
にふかれ、私は人生初の告白の返事を振り返り歩く。  
結果からいえば惨敗。

彼は好きな人がいる、と言った。フェリスの女のこ  
とだ。あんな人より私のほうが可愛いと思わないかと  
聞けば、思わない、と言われた。

フェリスとは駅前の喫茶店で、一人のお姉さんが仕  
切っている。私よりずっと年上のくせに化粧をしてい  
なくて、目が切れ長で少し怖い。

なんで、あんな人に負けたんだろ。悔しくて私はフェ  
リスを訪ねていた。からんからん、とベルが鳴って私  
の入店を知らせる。店内に客はいなかった。だが、

「あの」

カウンターには一心不乱にかき氷を頬張る、あの女  
がいた。こんな真冬になにしてるんだ。確かにこの  
店は上着を脱いでもなお暑いくらい、暖房が効きすぎ  
ているが。

「ああ、いらっしやい。好きなのところに座ってくれ」

「当たり前でしょ」

男の子みみたいな口調に少し驚いたが、平静を装った。

私は女に向かい合うように座る。さっきまではこの  
女に敵対心しかなかったが、嫉妬をぶつける気も失せ  
てしまった。どこがいいんだろ、こんな変人。

「ねえ、なんでかき氷なの」

「真冬に暖房の効いた部屋で食べるかき氷とは最高だ  
ぞ。世界から隔絶された気分になれる」

「じゃあ、私もかき氷ちょうだい」

現実から逃れられるなら、私もそうしかかった。女  
は一度小さな目を大きく開いて、そうか、とにこやかに  
笑った。

「この良さをわかる人間はなかなかいなくてな、なに味にする」

「どうでもいいけど、いちご」

食べかけの青いシロップのかかったかき氷を冷蔵庫に入れ、ちょうど一皿分くらいの氷を取り出した。そしてがりがりとかき氷機を回し始める。細い腕にしてはすごく勢いがあつて、手馴れている感じだった。

「はい、どうぞ」

赤色のシロップをかけたそれは、カウンターに静かに置かれた。

「いただきます」

スプーンで一口含んだら、いちご風の甘みと共に脳にきーん、と衝撃がくる。あまりの冷たさに頭がどうにかなりそうだった。

「その一瞬だ」

指先でこめかみを押さえていれば、女はくい、と口角をつり上げた。

「なにが」

「忘れただろう、現実を」

あ、と声を思わずもらしてしまった。

「本当だ。なんか、きーんって感じに気を取られてた」

「ははは。さては、よくない出来事があったのだろう」  
目をつぶってもう一口喉を滑らせれば、先程より弱くきーんとする。でも、この人にならわかつてもらえる気がした。

「聞いてくれる、お姉さん」

「ああ。なんでも聞こう」

お姉さんは奥にある椅子を持ってきてすつと腰かけた。  
た。

「フラれたの、昨日。お姉さんのことが好きなんだっ

て」

「私か。変わった人もいるものだな」

「ねえ、お姉さん。名前は」

「そういえば名前すら聞いていなかった。こんな話をしているのに。」

「名前は人を縛る。私はお姉さん、君は君でよいのだ」

「縛られたらいけないの」

「ああ。こんな風に共感してもらえたのは初めてだ。」

「私たちは互いに名前を知らない。だが、わかりあえる。それこそ特別な関係だと思わないか」

「なんかそれ、かっこいいね。いいよ。じゃあ、私は高校二年生、十七歳。お姉さんいくつ？」

「肌年齢は二十歳だ。すごいだろ」

「緩やかに口角をつり上げ、笑った。その様は、その辺の女優とか、清純さを売りにしてるアイドルにはない美しさで、どこか野性的だった。」

「すごいね。実年齢よりいくつ若いの」

「七つだ。つまり二十七歳になる」

「よく見るとお姉さんはすっぴんだったが鼻が小さく、整った顔立ちだ。自信があるという肌にはどんなシミもシワもなかった。それに比べて私は、目を大きく見せようとつけまつげをして、毛穴とニキビ跡を隠すためにファンデーションを塗り込んで。」

「それなのにお姉さんに負けている気がするのは何故だろう。なんだか惨めな気持ちになった。だけど私は負けたくなかった。」

「私、絶対お姉さんより綺麗になる」

「ほう、そうか。だがその前に君には知るべきことがたくさんある。次はいつ来れる」

「空っぽになった器を見てお姉さんは言った。」

「冬休みだからいつでも。明日でもいいよ」

「では明日にしよう。講義の内容は『美しさについて』だ」

講義ってなに、と聞けば、お姉さんは話の内容だと答えた。

「わかった。またこの時間にね。ところでかき氷っていくら」

「千円」

びっくりして開きかけた財布を閉じる。

「というのは嘘で、タダだ。学生から金を巻き上げる

趣味はない」

お姉さんは食べ終わったそれをてきばきと片付けはじめる。

「でも」

「明日来てくれなかったら千円、ということにしよう。それでどうだ」

「約束は守るよ、私」

「それでいい。私も約束は忘れない」

お姉さんは微笑んで、私を見送ってくれた。

冬の風に包まれながら帰る道のりは、不思議な出会いを祝福しているように思えた。

あれから一夜が明けた。今日は一月の寒さを代表している、といってもいいかもしれない。肌寒さで目が覚めて暖かいシャワーを浴びた。いつものようにヒーターとテレビをつけっぱなしにして、ごろごろしていれば時間になっていた。午後三時。昨日は四時くらいに行く約束をしたから、そろそろ準備を始めなくてはならない。

私はまだ新品同様の長袖のシャツワンピースを着て

鏡の前に立った。ワンピースは赤だったから茶色いタイツを選んだ。これなら気合いの入っていることが伝わるかもしれない。お姉さんの前では特に化粧をしたくないから、洒落た服を着て誤魔化するのだ。お姉さんはどんな格好をしているだろうか。またすっぴんに長袖ニットを細長い手足で着こなしているに違いない。

しかし、どんなに支度をしていても時間は迫ってこなかった。いつもは三十分くらい化粧をしていたからだ。部屋の中をうろつくことにも飽きてきてはやめに家を出ることにした。いってききます、と誰もいない家に眩いた。ふわふわのファーがついた白いコートを羽織って、履き慣れたブーツで歩く。

駅に向かって歩けばすぐに見える喫茶店フェリスは、今日も閑古鳥が鳴いていた。

からんからん。

「いらっしやい。はいね」

「そうだよね、でもいいかなって」

コートを脱いで、カウンター席に座った。

「では今日は講義をしよう」

そう言うとお姉さんはカウンターから出て店のドアにかかっている札をひっくり返した。

「ちょっと待って。こっち側がオープンになってるよ」

「今そうしたんだ。外から見れば閉店したと思うだろう」

そんな感じがいいのか、喫茶店って。呆れていると、お姉さんは、カウンターに戻ってきた。

「今日はスープが残っていてな。どうだ」

「うん。食べる」

そっと置かれたのはコーンスープのようだ。

「冷製だな」

「かき氷と同じってことね」

でも寒さをこらえて外でがんばっている人を思うと複雑だった。

「外で働く人をバカにしてるみたい」

と、思ったことを声に出してみても、お腹が減っていることにはわりはなかった。匂いが私を誘う。見た目も美味しそうなコーンスープだ。

「なんと、コーゲンボールを溶かしてある」

そう小声で耳打ちされ、私の手はすぐさま動いた。口のなかに冷たくてトロリとした液体が流れ込む。広がる旨味には唾液を飲んだ。

「はは。君も美には貪欲なのだな」

「別にコーゲンのためじゃない」

そういえば、とお姉さんは私をじっと見た。

「化粧をやめたのに、やはり着飾るのだな」

「化粧をしないのは、お姉さんと比べてなんかダサいから。負けてるみたいだし、すっぴんのほうが美人だなんておかしい」

「そうか。今日の講義に繋がるいい問題提起だ」

唇を三日月のようにつり上げた。

「では改めて講義を始めよう。例えば『あの人より綺麗になりたい』と『あの人のように綺麗になりたい』。どちらがより美しくなれると思う？」

お姉さんは右手の指を順番に二本立てた。

「それは、前者でしょ。超える勢いがあればもっと綺麗になれる」

私は人差し指を指さした。

「一理あるな。限度を決めてしまうのか、更なる上を目指すのか。では内面ではどうだろう？ 『あの人より綺麗になりたい』か、『あの人のように綺麗になり

たい』だ」

私は迷った。「あの人より綺麗になりたい」なら若々しい感情だ。だが醜い部分もある。「あの人のように綺麗になりたい」なら謙虚だが、それ以上綺麗にはならない。思考がぐるりと一周したが、なにを言えたいのかわからない。

お姉さんはそんな私を見かねて話し出した。

「『あの人より綺麗になりたい』というのは相手を敵視しているようにもとれる。「あの人のように綺麗になりたい」だと相手に憧れている。真っ直ぐな感情だと思わないか。内面の美しさなら後者が勝る」

お姉さんはそう言って中指を握った。

なるほど。純粋な感情こそ、内面の美しさと言えるかもしれない。

「でも、それじゃあ外見か内面の美しさ、どちらかを選べって言われてるみたいだよ」

お姉さんは、そう、と肯定して頷いた。

「だから私は、美しさ、というものがわからなくなりました。そのため、外見の美しさを捨てたんだ。肌年齢は自分と比べるものとして例外にしたのだ。唯一私が外見的に美しいとしたら肌の若さだけだろうな」

何かと比べて美しいかどうか。そもそも美しいって何なのだろう。人と比べたら内面の美しさを失う。

「待ってよ。綺麗だって思う感情そのものが何かと比べている気がするの。だから、最終的には、その討論の意味はないんじゃない」

お姉さんは椅子に座り直した。

「君は何かと比べないとそのものの美しさがわからないう訳だな。昔の私と一緒にだ。だが、それはもったいな

いぞ。心で感じるのだ。私もうまい例が出せない。私  
が初めて美しいと思ったのは一人の少年だ」

懐かしそうに目を細める。

私は興味が湧いた。当時のお姉さんも同じことを考  
えていたのか。

「どんな人だったの」

「初めて見かけたとき、彼は血まみれだった。猫の死  
体をわきに抱えて、穴を掘っていた。話しかければ車  
に轢かれたらしくてな。不幸を放っておけない。そん  
な人だ」

ああ、お姉さんはその人のこと忘れられないんだ。  
表情を見ればわかった。

「でも、それは優しいって感じじゃない」

私はお姉さんの思い出に相づちを打つ。

「そうかもしれない。懐かしくて話が逸れたな。その  
少年とは不思議と気があった。私も当時、美しさとは  
比べて初めてわかるものではないか、と少年に話  
していたんだ。それから、あるとき水泳部の練習を見  
に来るといい、と言われた」

「その人は水泳部だったんだ。そこで美しいって感じ  
たの」

「ああ。私は水泳の知識が全くなかった。だが彼の影  
での努力を知っていた。なかなかバタフライが泳げな  
いと嘆いて筋力トレーニングばかりしていたからな。  
初めて見たときは、もう圧巻だった。プールでは小さ  
な両腕を、同時に大きく振る動作がすごく力強かった。  
にじみ出ている美しさがあった。比べる対象などな  
かったが、美しい。それが比べずに美しさを感じた瞬  
間だ」

比べない美しさか。理論ではないのかもしれない。



それでも私はお姉さんの言いたいことを理解していた。「きつと、どんな泳ぎを見てもそう感じたんじゃない。努力する姿が美しく思えた。そうでしょ」

お姉さんは通じたことが嬉しかったのか無邪気に笑った。

「その通りだ。そして、あと二つ理由がある。一つは私が、努力というものと無縁だったこと。そのとき、自分より距離があるものを人は美しく思うのかもしれないと考えた」

確かに自分とかけ離れたものを見たら、衝撃を受ける。その衝撃が美しく見えることがあるかもしれない。だが気になるのはもう一つの理由だ。

「まだ一つ、理由があるの」

「ああ。私が彼を好きだった、ということだ。私は、恋をしていた」

好きだから、綺麗に見えた……。私にはそんな経験はなかったな、と思いながらも、恋の力を知ってしまったからどこか納得していた。恋は見える世界を全てを鮮やかにした。失恋は世界を灰色にしてしまったが。

そこで、こんこんと音が鳴った。扉のほうだった。ガラス越しに赤いマフラーが見える。もしかして。

「和臣かな」

「む。金曜日くんとは知り合いか。では中に招くとして」

お姉さんはカウンター越しに、ちょいちょい、と手招きをした。

「え、ちょっと待って」

私、今すっぴんなのに。告白を断られてから会うのは初めてだった。

からんからん。和臣が入ってきてしまった。私は顔

を背ける。お姉さんはカウンターから出て和臣を迎えた。

「あの、クローズって。なにかあったんですか」

「今日は彼女のための特別休業だ」

和臣はこちらを見たようだ。

「ん。お前どこかで」

「ばれた。最悪だ。」

「ああ、もうお姉さんのバカ」

お姉さんのほうを振り返ったつもりが和臣と目がばっちり合った。

「お前……こんなとこでなにしてんだ」

「気まずそうに和臣は視線を反らした。」

「お姉さんに講義をしてもらったの。他意はないよ」

「ふうん。あの、座っていいですか」

和臣はお姉さんに聞く。

「ああ、かまわない。常連客には甘く、がモットーだ」

和臣もお姉さんの近く、つまり私のすぐ隣に座った。本当に最悪。

「なんで制服なの」

「部活帰り」

「あ、そ」

会話が続かないが、お姉さんはスープの準備をしだしてしまった。

「どうぞ。冷たいスープだが」

「あ、ありがとうございます」

照れたのか頬を赤くする。

私、本当にこの人のこと好きだったんだろうか。美しいとまではいかなくても、かっこいいとも思わない。そういえば好きになったきっかけとかも特にない。幼なじみで家は隣同士。そこからなぜ恋愛しちゃったん

だろう。

「なに、じろじろ見て」

「なんか今わかったかも。和臣のこと別に好きじゃなくなっちゃって」

「そうかよ」

和臣はスープを飲んだ。私も残りのスープと共に言葉を飲み込んだ。

「で、なぜわざわざ閉店中なのに入ってきたのだ」

「あ、いや。ただ心配で。去年も正月すらやってたのに、休みなんて変だなんて」

「ああ。そうだったか。気まぐれなものでな」

和臣は下を向いた。

「俺、最近こいつに告白されて。勇気をもらいました。それで今気づきました。もし、常連じゃなくてただの客だったらあなたに話しかけることも出来なかった。そんなの嫌なんです」

和臣はまっすぐお姉さんを見つめた。

「好きです、付き合ってください」

顔を更に、耳まで赤くして和臣は言った。

「和臣……」

よかったね。やっと言えたんだ。

「気持ち嬉しい。私も金曜日くんのは好きだ」

「じゃあ」

和臣の瞳は期待で輝く。

「だが恋愛感情はないんだ。すまない」

「そう、ですか」

残念そうに和臣は頷いた。しんみりとした空気になる。

「……お姉さんやっぱり、さっきの少年とか言う人が忘れられないの」

「ああ。そうなのだ。彼とは同い年だから、もう少年ではないが」

「好きな人、いたんですね」

お姉さんはゆっくり頷いた。

「まあ、そうだな。君たちは若い。新しい恋をすべきだ」

その言葉を最後に私たちは解散となった。

外に出ると雪が降っていた。

私たちは同じ道を行きと違う気持ちで歩く。お姉さんのように優しく、綺麗な人になりたいと。

「あーあ。初恋って実らないんだな」

「そうだね。たぶん私も和臣が初恋だったから」

「あとさ、関係ないけど、お前、化粧してないほうがいいよ」

「そうかな」

やっぱり気づかわれてたか。右頬のニキビ跡に触れる。

「なんかいい。話しかけやすい」

和臣は久し振りに私に笑った。

「あ、ねえ失恋といえど真冬のかき氷が効くの。一緒に食べない」

「なにそれ。別にいいけど」

私たちの初雪はこうして散っていった。